放課後等デイサービス スマートキッズ発達支援研究所便り「きらっと」9号　2020 年9月1日
研究所ホームページ https://smart-kids.co.jp/labo/

# 変化する時代の中で支援の輪を広げるために

主席研究員　神田基史

国立大学附属の特別支援学校（知的障害）に 31 年間勤め、大学教員になって８年目を迎えている。１つの学校に 31 年間勤め続ける教員は今ではほとんどいないと思うが、私が勤めたこの学校には、勤続 30 年の教員や 20 年の教員がたくさんおられた。教員になって 10 年たたない者は附属学校では一人前とは言えないとか、職員会議での発言権はない･･･みたいな雰囲気があった。３，４年で異動する教員もいて、長くても８年で異動という昨今の学校事情からすると、例外的な学校であった。勤務年数の長い教員が多いことでの善し悪しが論じられたこともあるが、今になってみると、子どもの成長を幼稚部から高等部までの 12 年間も継続して見ることができる環境に長居できたことは、私にとっては大きな学びであった。もちろん、良き先輩、良き同僚に恵まれたからこそ今の私があると感謝している。

大きく変化する時代の中で、次のような思い出と感慨をもつ。

大学生の夏に宿泊してボランティアをした某県の重症心身障害者施設では、職員全体が養護学校義務化反対の立場であった。私は、養護学校教員を目指す大学生だったので面食らった･･･。

初任者だから勉強してこいと言われて参加した日教組の教育研究集会（障害児教育部会）。教員が二つに分かれてヤジと怒号の口論をしていた。これから私が進む世界はこういう場所かと暗澹たる思いになった･･･。昭和 54 年の養護学校義務化（東京都は昭和 49 年）以降、この種の論争はなくなった。

「子どもたちを社会に適応させる」などと言えば、「適応主義反対！」と障害者団体に叱られた。今は特別支援学校学習指導要領解説でも ICF の障害概念が記述され、環境因子（物的・人的環境）を変えることが唱導される。また、糾弾すべき相手のところへ乗り込んで戦う障害者団体はなくなった。

私の学校では、幼稚部・小学部の登校・下校は基本的に母親が送迎する。スクールバス利用する子どもたちもいるが、停留所までは保護者（母親）が送迎した。珍しい例として、母親の代わりに子どもの祖父が毎日送迎をしたご家庭もあった。しばらくすると、少し状況が変化した。送迎ボランティアが現れ、徐々に増えていった。

ある学校の玄関前での下校の様子。駐車場の歩道スペース１列目には、スクールバスが４，５台並ぶ、その外側 2 列目には放課後支援（放課後等デイサービス）のマイクロバスやワゴン車、乗用車が 10 台近く駐車し、更にその外側 3 列目に送迎保護者の自家用車が並んでいた。学校の送迎風景もだいぶ変わった。

私の勤めた学校には、卒業生が月１回（日曜日開催）集まる「青年学級」が教員と卒業生保護者の連携で運営されており、参加者は卒後間もない青年から 50 歳前後の大人まで年齢層の幅が広かった。通い慣れた学校に来て、同窓の仲間（先輩、後輩）や先生達と共に楽しく過ごす姿を見て、月１回の青年学級が

彼等の数少ない安全・安心の場となっていると強く感じた。この青年学級は、卒業生保護者を会員とする社団法人の主要業務の一つであるが、保護者と教員が何でも連携・協力する時代だった。活動の運営に当たって、受付や昼食の準備等の雑事は卒業生保護者が行ない、活動やホームルームは、教員と外部専門家（お茶、生け花）が指導・進行した。この指導・進行も含めて、昨今は保護者が活動のほぼ全てを仕切る形で運営されるようになった。教員が多忙となって参加・協力が得にくいためである。一昔前の教員としては忸怩たる思いであるが、他方で保護者の底力と団結の強さに頭が下がる･･･。親は何時までも親として頑張り続ける。この親たちをどういう形で支えるかが大きな課題だ。教員の出番が少なくなった。教員が多忙で動けない。この状況を変え得る力はどこにあるのか。

「地域に開かれた学校」から「社会に開かれた教育課程」と唱われる時代となった。教育活動が学校の中だけでなく、地域の人的資源と物的環境とを活用し、地域に出向く多様な教育活動が求められている。一昔前、障害児の教育と権利を求めた運動の主体は、本人・保護者と教員だった。今、保護者の多様なニーズの実現を援助できるのは誰か、教員の多忙さを緩和し、学校や保護者と協働して多様な子どもたちを支える力をどこに求めるか？私には答えは出ているように思えるが、みなさんは如何か？

**神田　基史（かんだ　もとし）**　帝京大学教育学部初等教育学科　教授

幼稚部から高等部まである知的障害養護学校で 31 年間教員生活を送りました。この間、保護者と教員との協働の大切さを痛切に感じるとともに、学校の教育・運営を地域の関係者や NPO、近隣の幼稚園や学校、そして各種ボランティアの皆さんに支えて頂いたことを心から感謝しております。「社会に開かれた教育課程」が唱道される時代となり、地域との多様な形の連携・協働が一層求められています。ともに新しい一歩を踏み出しましょう。

**略歴**

昭和 54 年 3 月　鳥取大学教育学部養護学校教員養成課程　卒業

昭和 56 年 3 月　筑波大学大学院教育研究科障害児教育コース（知的障害専攻）修了

昭和 57 年 4 月　筑波大学附属大塚養護学校　着任

平成 9 年 4 月　同校副校長

平成 28 年 4 月　同教授～現在に至る